

人生の贈りもの

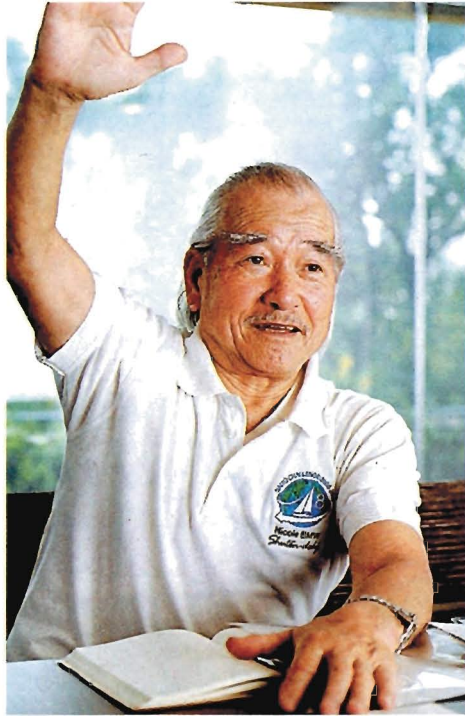
ヨットマン 斉藤実(78)

1

8度目の単独世界一周は中古船で

——ヨットで8度目の単独世界一周を昨年9月に達成されました。最高齢、最多回数ともご自身の記録を塗り替え、植村直己冒険賞に輝く快挙。横浜を出港してから約3年でした

2008年10月から1080日、当初は翌年春には戻る予定



「自分を冒険家とは思っていない」＝麻生健撮影

が、予想外のことがいろいろ起きました。何と言っても今回は、当初から資金不足でした。まず船を探索した時、適当なヨットがアメリカにあったのですが36万ドル。ヨット本体のほかに補修や改造に約2千ドルかかりますから、手が出ませんでした。

仕方なくほかを探し、ハワイにあった中古ヨットが8万ドルというのでそれを買いました。1989年建造と古く、エンジンから何から交換しましたが、金が足りなくて完全ではなかった。70〜80%の状態で出航したのです。

——新しくしたヨットは「酒呑童子Ⅲ」号ですね。前回の世界一周(04〜05年)で乗った「酒呑童子Ⅱ」ではだめだったのですか

今回は日本からオーストラリアに南下したらアフリカ、南米と回る「西回り」に初めて挑戦しました。「酒呑童子Ⅱ」は西回りには向きません。

というのは南極海を走るわけですから、流水に遭います。流水は必ず西から来ますから、東回りならば水がぶつかってもそれほど衝

撃はありません。ところが西回りの場合、氷と正面衝突です。強化プラスチック製の前の船ではもたない。本当は軽くて丈夫なアルミ製がいいのですが、値段が高い。それで鋼鉄製を買ったのです。

出航して間もなく、赤道を越したらすぐ問題が出ました。どこからか海水が入ってくる。ジェネレーター整備も必要で、シドニーに入りました。この時点で「無寄港」の記録は途絶えました。

シドニーを出てからも衛星電話、無線機、とトラブル続きでホバート(オーストラリア)、ケータウン(南アフリカ)で修理し、すっかり遅れてしまいました。ホーン岬を回ったのが09年の4月です。

——南米大陸の先端ですね

ほんとうは3月末までに回らないと、天候が荒れるんです。4月6日に回って、流水帯を乗りきって船を止めて休んでいるうちに、ロープがプロペラにラダー(かじ)にひっかかって操縦できなくなりました。風速35節以上、セールを上げることができませんでした。

東京の事務局経由で近くにいたチリの大型漁船に連絡がとれ、3日かけて引航されてマゼラン海峡のチリ側にあるブインタレーナスに入りました。(聞き手・大庭牧子)

さいとう・みのる 1934年、東京・浅草生まれ。家業の燃料会社に勤めるかたわら39歳でヨットを始める。50歳で退職後、外洋レースに参加。最初の世界一周は90〜91年、「BOCチャレンジャー」に参加し完走した。

大地震や手術… 寄港先で足止め



8度目の単独世界一周を目指して航海中、寄港先を余儀なくされたチリ・プンタアレナスで=2009年11月

——8度目の世界一周は南米チリ沖で遭難しかかりました。その後どうなったのですか

入港したチリのプンタアレナスで、引航してもらった漁船会社と金銭上の問題が起きました。引航料12万ドルを払わないとヨットを差し押さえるという。裁判になると3年かかるといわれ、現地の日本人の紹介で弁護士を雇い、示談交渉をして4万ドルで決着しました。3カ月以上かかりました。

ヨットもぼろぼろになり修理が必要で、部品はアメリカから取り寄せ、修理する人間も2千ドル以上離れたサンティアゴから呼ぶ。そうこうするうち私がヘルニアになっちゃって、手術しました。プンタアレナスを出航したのは、2

009年10月末。半年の足止めでした。

ルールに従い引航されたところへ戻り、またケーブホーンを回りますが、停泊中に燃料タンクに水を入れられていて、プンタアレナスへ逆戻り。タンクを掃除して10年1月末に再出港です。

——チリに10カ月……

まだまだ。今度はサンティアゴの南700キロほどのバルディビアという町に整備に入ったら、2月27日のチリ大地震です。係留してあるヨットにいたらものすごく揺れて、ハッチが落下、右腕の骨にひびが入る大けが。出航できたのは3月末でした。

——日本に戻るまでにはさらに1年半かかりました

かじの部分から油が漏れたり、マストにひびが入ったり。セーラムダメージを受けている。修理のため寄港したハワイでは、そろそろ出航できるといふとき、私が自動車事故に遭いました。

左足の靭帯を痛め、手術が必要だという。私は心臓の持病があつて、1988年に参加したオーストラリア一周レースでは、発作のためリタイアしました。セーリング中も薬はいつも飲んでいきます。

手術は心臓に負担の少ない局部麻酔にしてくれと言ったが、医者は全身麻酔でないとだめだ、と。手術まで3カ月、さらにリハビリが3カ月。ゴール目の小笠原でも動きの遅い台風のために4日間動けませんでした。

——今回の航海計画はいつごろから始まり、支援態勢はどのようなに組まれたのですか

2004〜05年に単独無寄港で7回目の世界一周をしました。が、いずれも追い風を利用できる東回り。より難しく、やったことのない西回りに挑戦したいと私が言い出したのが07年です。

ヨット仲間などがチームを立ち上げ、スポンサー探しから始めました。チームのスタッフはみなボランティアで、東京に12人ほど。ほかにハワイ、オーストラリア、アメリカの友人も協力してくれました。

(聞き手・大庭牧子)

人生の贈りもの

ヨットマン 斉藤実(78)

③

50歳で家業引退、山男から転身

——ヨットで外洋航海に出るようになったのは50歳を過ぎてからですが、それまでの人生は

に外にも出られない。長男に何かあったときのスペアです。

私の場合も跡取りの兄が病弱だったこともあって、家業を手伝

で、戦後はカソリンや灯油、工業用油も扱いました。6歳上の兄がいて、私は次男坊。次男というのは中途半端で、後継ぎではないの

なればなりません。大学に行きたかったのをあきらめた反動で資格をいろいろ取り、むちゃくちゃ働きました。赤字だったガ

ソリンスタンドを立て直し、潤滑油のセールスも得意先を増やしてただの販売店から特約店に昇格させました。

し、不動産も買いました。退職する時には父や兄と少々もめました。株式の一部も譲渡され、1億円近い資産になりました。それを使って初めての外洋レース、メルボルン—大阪ダブルハンド(2人乗り、1987年)のための「酒呑童子I」、世界一周レース「BOCチャレンジ」(90—91年)に初挑戦した「酒呑童子II」を買ったのです。

専務としてせっせと働きながら、一方で50歳で仕事は辞めようと思っていました。それは学生時代、モンテニューの「エセー」に影響されたからです。

死を恐れるより、いつ死んでもいいように生きることが大切だ——ひらたく言えばこんな意味の文章に出会って、死ぬ時にやり残したことを悔やまないようにしようと思った。その上で人生をトータルに考え、20歳から50歳まで全力で働いたら、あとは好きなことに打ち込もうとプランを立てました。

引退後に備えてコツコツ貯金をして、不動態も買いました。退職する時には父や兄と少々もめました。株式の一部も譲渡され、1億円近い資産になりました。それを使って初めての外洋レース、メルボルン—大阪ダブルハンド(2人乗り、1987年)のための「酒呑童子I」、世界一周レース「BOCチャレンジ」(90—91年)に初挑戦した「酒呑童子II」を買ったのです。

——若いころは山男だったそうですね

そのころ知り合いにヨットでもと誘われました。金がかかるんじゃないかと心配しましたが、神奈川県・江の島を拠点にした会員制クラブがあった。これが運命の出会



生まれ育った浅草のお祭りで=1987年

い、39歳のときです。個人的にも操船を教えてください。知人がいて、360度、どんな向きの風にも対応できる技術を短期間で身につけることができました。

14歳の時、中学の登山部で真冬の丹沢が初めての登山。米軍の放出品の寝袋を東京・御徒町に買いに行ったような時代です。私は決められたフィールドの中で細かいルールにしばられるスポーツが好きではなく、仕事をするようになります。

引退後に備えてコツコツ貯金をして、不動態も買いました。退職する時には父や兄と少々もめました。株式の一部も譲渡され、1億円近い資産になりました。それを使って初めての外洋レース、メルボルン—大阪ダブルハンド(2人乗り、1987年)のための「酒呑童子I」、世界一周レース「BOCチャレンジ」(90—91年)に初挑戦した「酒呑童子II」を買ったのです。

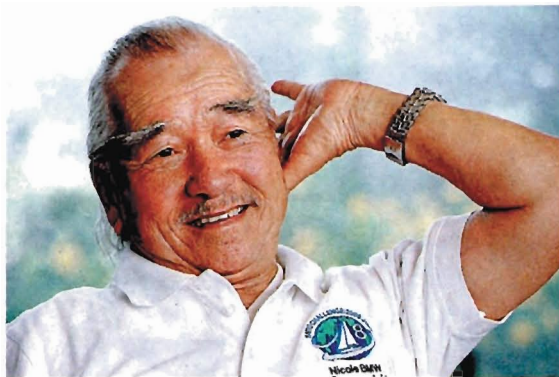
人生の贈りもの

ヨットマン 斉藤実(78)

4

転覆で九死に一生、でもまた大海へ

—航海中はさまざまトラブルに見舞われていますが、死ぬかもしれないと思ったことは



「死なないためには絶対パニックに陥らない、あわてないことです」—麻生健撮影

1994年〜95年の世界一周レ

ース「BOCチャレンジャー」では南極海で大しけに遭いました。キャビンの寝棚で仮眠していたら、突然床にたたきつけられました。ところがよく見ると床だと思っただけで、ヨットが転覆していたのです。

頭は荷室のドアに、体は外れた階段にはさまって身動きできませぬ。そのうちキャビンに浸水してきました。もうだめだ、と観念しかけたが、こんな格好でくたばりたくない。船が揺れて水面上に鼻が出る瞬間を逃さずどうにか呼吸を続けました。

どのぐらいの時間がたったのか、突然体が浮かび上がり始めました。船底に取り付けた重りの作用で、ヨットが元の姿勢に戻りま

した。

ただリーダー、無線機、ファクス、パソコンなどは海水で全滅。

レース本部とは23日間も交信できず、日本にも「行方不明」のニュースが流れたようです。げんにこのレースの参加者で、同じしけに遭ったハリーという老練なヨットマンは消息を絶つたままでした。

このレースの後だと思えます、私が死んだら墓石に刻んでもらう文章を作りました。今持っている日記帳にも書き留めてあります。英文で「彼は終生孤独だった……何があっても決してあきらめず落胆しなかった……つねに笑みを絶やさなかった……」。

—危険な目に遭っても、また航海に出る、海の魅力はフリーダムですね。何の束縛も

受けない。自分の思った通り、考えた通りにやれる。ストレスたまらないですよ。

—結婚なさらなかったのもそのへんと関係ありそうですね

うーん……登山やヨットをやる人は独身が多いかもしれませんね。私も結婚していたら世界一周なんて絶対やらない、100%できませんよ、ははは。

—すでに次の航海も考えていらっしゃるのか

北極海に行きたいんですが、まず船がね、「酒呑童子Ⅲ」は鉄製だから重すぎて。アルミ製の40トンぐらいの中古艇でもあればねえ。スポンサーを見つけてるのも問題です。体力、筋力はまだまだ自信があります。

—ところでヨットにずっと

「酒呑童子」と名付けているのは

飲んべえですから。ヨットやり始めたころから必ず缶ビール持参。世界一周にも一応何でも積んでます……日本酒、焼酎、ウイスキー、ブランドデー、ワイン、シャンパン、もちろんビールも。

ただ航海中はあまり飲みませぬ。誕生日とか日付変更線を越えたとか特別な時だけです。睡眠も1時間半から2時間を3回、という生活ですから飲んでる暇がないです。

オカに上がると飲むのが楽しみなんです、この春、肺から出血して、酒は禁止されてしまいました。つらいですねえ。

(聞き手・大庭牧子)「おわり」
◆次回は漫談家の綾小路きみまろさんです。